

ほなひ歴史通信

第56号
2010.9.1

分校の独立

太子町立初原小学校、同じく槇野地小学校は、明治七年に創立された学校である。以来佐原小学校の分校となったり、あるいは分離して独立校となったりの歴史を繰り返し、昭和三十一年には佐原小学校から独立し、太子町立槇野地小学校となった。その前年昭和三十年に太子町が大合併を果たして、校名も太子町立佐原小学校となった。この機会に独立しようという機運が高まり、強力に運動を展開、初原分校と槇野地分校はそれぞれ独立したのである。その頃の児童数は初原も槇野地も百名を超えるようになり、これだけの児童数があれば独立しても恥ずかしくないという住民の意識もあった。そこに町村合併である。この機会に念願であった独立を言うことになった。分校という立場は本校と比べるとなんとも肩身が狭い。その上、かつての四大節（四方拝、紀元節、天長節、明治節）の時、また運動会や卒業式も本校まで歩いて行かなければならない。それも峠を越えての往復だから大変だった。そういう分校の立場だから、出来れば自分の学校でと言う意識は大人にも子供にもあった。こうして両分校の住民は協力して独立運動を展開したのである。その当時、町村合併や学校統合の機運が高まり各地で学校の統合合併が行われ

るようになっていた。財政の健全化の為、教職員の人件費の削減や、校舎設備費の削減が叫ばれていた。その時に分離独立をすることはいわば時代の流れに逆行するようなものであるから、県では簡単には賛成できない。

初原、槇野地両区の住民は、県に対する強力な運動を展開することになった。

交渉にあたる人を選び、漸く独立を勝ち得たのである。何度か繰り返した独立と分校という不安定な立場に終止符を打って、いよいよ独立校である。地区の住民は大喜びで、新しい小学校の開校式を盛大に挙行、昭和三十一年四月一日が新発足の日だった。ところが、その後四十年にして、再びさはら小学校に統合された。児童数の減少によるやむを得ない統合だった。平成八年三月三十一日をもって明治以来百二十一年続いた歴史を持つこの学校もついにその幕を閉じた。

余談 町村合併によって、旧村名が消えてしまい、やがては人々の記憶からも消えてしまうかも知れない。すでに佐原という村名が残っているのはさはら小学校くらいのものか。

滋賀県に安土町という信長の安土城で有名な町があった。町村合併で近江八幡市になり町名がなくなった。住民は反対したが、総務省はいったん決まったことを覆すことは出来ない新市発足後新たに分離するしかないと言う。

独立の運動を展開して勝ち取る外ないということだ。歴史上有名な地名はうっかり消してしまうことは考え物だ。太子町にもそういう地名はないだろうか。

先のサッカーW杯のカメルーンのキャンプ地で有名になった九州の中津江村は、日田市と合併して村名が消える事になったが、住民の強い要望が実り、「日田市中津江村」と村名を残した。住民の意識が問われる時代でもある。（石井）

二十十年の夏 故郷への想い

大子町教育長 都 筑 積

六月十六日に高梨保彦前教育長の後を引き継ぎ、教育長を拝命した。責任の重さを痛感している。今春三月に三十八年間の教員生活にピリオドを打ち、故郷大子町へ戻った。奥久慈の山々は昔のままであり、久慈川の流れも清らかであった。しかし四十年前と一番違っていたのは、町のにぎわいであった。駅を中心とした商店街のにぎわいに昔の面影はなかった。しかし、町に住む小・中学校の同級生は私を温かく迎えてくれた。

大子町の長老は父や母の思い出を話してくれた。改めて、父や母が愛した大子町に戻れたことを心から感謝したい。

私は、昭和二十四年に浅川で生を受け、大子小、大子中に学んだ。給食は小学校時代の一歩の思い出である。四時間目になる給食が待ち遠しかった。大きな釜で忙しそうに献立を調理するおばさんたちに、「早く、早く」と心の中で催促していた。脱脂粉乳のミルクも初めての飲み物だった。当時、牛乳は貴重な飲み物だった。給食に使う食器は袋に入れて毎日持参した。

また、休み時間には、ドッチボールやソフトボールに熱中し、クラスの人数が多く、クラスを半分にしてもチームが編成できた。小学校には体育館やプールはなかったが、特に不便を感じたことはなかった。水泳は夏休み前に、久慈川まで出向き水遊びを楽しんだ。川の流れに体を任せる楽しみは格別だった。

中学校時代の思い出で忘れられないのは自転車通学だ。舗装されていない砂利道の走行に苦労した。何度か転倒したり、トラックがまき散らす砂埃に閉口したりした。学級委員長の制度や生徒会があり、小学校との違いを実感した。夏休みには、生徒会の幹部研修会の合宿があり、リーダーの心得を厳しく先輩や先生方から指導された。また、クラスマッチ、部活動にも没頭した。授業は、一時間ごとに先生が替わったり、テストの点数

が張り出されたりした。「教研テスト」と呼ばれる県下一斉のストもあり、他の学校の成績優秀者を知ることでもできた。

小・中学校に共通する思い出は、冬の寒さだ。雪はもちろん、川が全面凍るということも珍しくなかった。耳たぶや手足がしもやけで血が噴き出すこともあった。昔は本当に寒かったと思う。暖をとるために、学校のストーブはだるまストーブであった。石炭に火がつくまでの小枝や薪は、当番が家から持参していた。

また、長い休みや休みの日には、川や里山でよく遊んだ。水に潜ったり「さげ針」を仕掛けたりして、ウナギやナマズを捕まえた。大子清流高校の下を流れる押川の大関と呼ばれる堰では、遡上する若鮎がおもしろいほど大量によくとれた。捕まえた魚は常に食卓に上った。

黄イチゴやあけびもよく口にしました。栗もキノコも豊かでした。桑の実やヤマブドウで唇を「群青色」に染めて、祖母や母によくしかられたことも懐かしい思い出である。

一方、還暦を迎えた今、無性に懐かしき思い出されるのは、祖父から教わった農業に関わる行事だ。正月があけると鉾入れ、小正月の繭玉飾り、鳥追い、春祭り、盆踊り、十五夜、秋祭り、恵比須講など楽しい行事がたくさんあった。今は那珂市になったが、「静神社の祭り」に連れていってもらったことも忘れられない。

そして今度は、私たちが大子町の豊かな自然と人々の暮らしをしつかりと後世に引き継がなくてはならない。折しも十月には吉村昭氏の「桜田門外ノ変」が映画化され、公開されるという。主人公の関鉄之介は、大子町にゆかりが深く、袋田蒟蒻会所や大子郷校の設立に尽力したという。

事件から百五十年。豊かな町づくり、人づくりを怠れば、時代を駆け抜けた先人達に顔向けができないと思っている。

八溝山麓の御立石と和合石

常陸太田市水石会顧問

安藤 政蔵（夾石）

「新名石探訪」で八溝石を載せることになり、一昨年夏、打ち合わせに大子八溝石愛好会事務局の益子政男さん方を訪問した。

その時、壁に貼ってある写真「御立石」が目にとまった。益子さんに尋ねると、近くの大室山頂にある八溝の神とダイダラボーが出てくる民話の石とのことである。益子さん達北郷会の皆さんが道を整備し、道標を設置し、便宜を図っているという。行きたいと言うと、「普通車では無理。秋になったら軽四駆で案内します」と親切に言ってくれた。

その秋は登山を見送り、一年後の秋、ご好意に甘えずに単独で登ることにした。



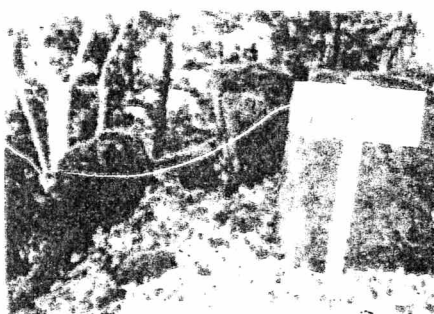
御立石（幅5.3m、高さ5.2m）

十一月二十五日、晴天。国道一一八号下野宮を左折して約一kmで大室山登り口に到着する。北郷会作「のんびりの郷」案内図が目に入った。図に従って狭い急な山道を十分程度進んだ所で車を降りて、徒歩となる。狭く急峻な道を難行二十分、やっと山頂に着いた。

御立石は予想以上に大きな花崗岩で、断崖上に斜めに立っていた。説明板には「昔、ダイダラボ坊という大男がいた。浜で大蛤を食べていたが、山の幸を食べたくなり山に向かった。丁度その頃、八溝の神と男体山の神が土地争いをしていて、八溝の神が男体山の神をめぐって投げた大石が、ダイダラボ坊の方へ飛んできた。ダイダラボ坊は、丸太棒でその石を叩き落とし足で踏んづけた。見ると石に草履の跡が遺っている」と記されている。

御立石の外に花崗岩は見当らない。天変地異で飛んできたのだろうか、不思議である。

御立石から東の稜線を廻り、約三〇〇mで東の山頂に着いた。和合石は、木立に囲まれた小高い丘に落ち葉を敷いて、向き合い座していた。説明板には、「昔昔、その昔、海に住む男と山に住む女が大室山で逢い引きしたそう。それを見た大室の神様が神聖な場を汚したと怒り、二人を石にしてしまったそう」と、山縁が記されている。



和合石（左が男石、右が女石）

石の前で、もしかするとその神様は女神であり、二人に嫉妬して石にしてしまったのではないか。しかし、石と化して永劫一緒になれたのだから、よかったのではないか等思いを巡らして、午後二時に下山した。

※ダイダラボ坊伝説は県内各地に残っている。ダイダラボ坊のこと、水戸近郷の内原には大足という地名が現存している。

『生きた証・私の抑留記』(一)

全国強制抑留者協会茨城県支部長

須藤 富之助

私は昭和十六年三月十五日、地元の太子農学校を卒業すると同時に家業の製材業に就いた。当時の日本は、支那事変後戦局が拡大し、戦況は激しさを増していた。その年の十二月八日真珠湾の奇襲攻撃によって大東亜戦争が開戦した。戦時体制によって我が製材業界も統合し、茨城県木材株式会社が創設され、私は月給八十円の社員となった。

戦争は初期戦では圧倒的戦果をあげていたが、戦局は激しさを増し、知人の先輩達も次々と征途について行った。私にも徴兵検査がきた。発熱で体調は思わしくなかったから、結果が気になった。結果は予期した通り第二乙種合格であった。意外であったが応召は間違いないと思った。

○昭和十九年七月二十日、召集令状を受け出征

遂に来るべきものが来た。朝鮮平壤第四十二部隊の召集部隊で富山西部四十八部隊に集合の令状を受け取り、挨拶まわり、送別会などで慌ただしい日が続いた。気にしていたことが起こった。太子町本町にある佐和家での送別会が二時間が過ぎた頃、父の病院診察に付き添っていた叔父からの電話が入った。「父親の病気は重く、手遅れで如何ともしがたい状態である」との報告であった。処置なしの診断とはなんと酷なのか。出発を前にしてこんな状態では心残りが募るばかりであった。

出征は日に日に迫り、近所の皆さん、地区の皆さん、親戚、知人と多くの皆さんが門出を祝ってくれた。家族とも別れを惜しんで挨拶をした。父親は寢床に臥したままの弱々しい身体で見送ってくれた。これが最後の別れになったことは残念無念であった。

駅では役場関係の方をはじめ、在郷軍人分会代表挨拶後、水戸駅の列車に乗り込み、歓呼の声に送られ、郷里を後にした。水戸駅に到着すると、各方面から応召された人たちで駅頭は埋めつくされていた。

水戸駅では係の指示に従い、割り振られた車輛に乗り、富山の西部四十八部隊に向かつて出発した。翌朝列車は富山駅に到着した。到着後は、引率者の指揮に従い、三日間ぐらい小学校の教室で起居の生活をした。その後、再び富山駅から列車に乗り、乗船する下関に向かった。車内は茨城、栃木、群馬の三県からの召集兵だった。出征兵達は、下関に到着するや否や貨物船を改造したような輸送船で釜山港へ向けて出発をした。

○朝鮮平壤第四十二部隊初年兵として入隊

やれやれの思いで到着した第一歩は、未だに経験したことない特有の臭気であった。なんと表現したらよいかわからない異様な臭気には閉口した。さらに、トイレに入って驚いたことは息が詰まりそうな強烈な臭気であった。後でわかったことは、食事の関係で国が変われば随分と変わる異国の地の第一印象を強く感じた。

釜山で我々を待っていたのは、北朝鮮平壤行きの貨物列車であった。その貨物列車は有蓋貨車を改造して敷設が用意されていた。結果的には長時間の乗車には横になれるから座る客車に乗っているよりは身体は休めたかも知れない。列車は平壤に向かつて動き出した。「一体、どこに行くのだろうか？」不安の道程であった。

目的地の平壤に着くや否や、平壤駅周辺に目を向ける余裕もなく、秋乙地区にある朝鮮平壤第四十二部隊へ向かった。部隊は、平壤から五、六キロぐらい離れた平坦な地にあった。

いよいよ入隊である。持ち物も服装も全部私物のままで営庭に整列をした。直ちに隊の編成があり、中学校卒業以上の者は、第二中隊に集められた。第二中隊には大学専門学校、師範学校、中学、工業学校卒業者が集まった。自分も第二中隊に入った。その後、早速被服受領、私物の梱包指示と慌ただしい作業に入り初年兵としての第一歩が始まったのである。

私は初年兵の第二班に編入され、軽機関銃班となった。「軽機は中隊の虎の子だ」などと気合いを入れられ、軽機班としての訓練が始まった。班長竹内伍長の指導で「分解結合の訓練」をきびしく教えられたが、なかなか覚えられなかった。

夜はわずかな時間であったが、自由時間が与えられ、その時こそ楽しい一時であり、故郷へ便りを書くこと、特に応召時に不安な容体であった父親の具合が気になり葉書で確かめた。故郷からの返事は、順調に回復しつつあるようすが書きつづられていたので、全快を祈るばかりであった。

○幹部候補生を志願

班内の生活に大部慣れてきた頃、幹部候補生志願者の話が出てきた。志願資格は第二中隊全員にあり、希望者は消灯後勉強するために中隊長室を解放する旨の達しがあった。私は迷ったが志願し、意を決して勉強することにした。志願した者は十二・三名くらいだった。十二時ごろまで『歩兵操典内務令礼陸軍式令戦陣訓』等の本で勉強を続けていた。

私の所属する内務班は、朝は六時起床で慌ただしい一日が始まる。班内で三人から四人くらいだったと思うが、起床と同時に中隊の下士官の銃剣術の朝の稽古の相手をするのである。年季の入っている伍長や軍曹の下士官相手では手応えは大きかったが、私は剣道をやっていて関係もあって、初年兵としては上出来だという一応の評価を得た。

きびしい訓練が続いて、夜は毛布に入ると、数分後には深い

眠りに入ってしまうのであるが、この日（昭和十九年十月三十日）に限って眠りにつくことができなかった。父の死が現実のものとなってしまうたのである。夜、点呼終了後将校室に呼ばれ、父の死の連絡を受けた。「お父さんは残念だった。本来なら公用で故郷への方法があつたけれど現在ではできない。理解してくれ」とのことであつた。おそらく家が家では、公報によって危篤の打電、引き続き死亡の打電をしたので、私は公用で帰宅できるものと思っていた。しかし、帰ることはできなかった。

幹部候補生志願者以外は、三か月間の教育終了後、内地に帰還した。その間我々は衛兵勤務に就かされたが、勤務についても故郷のことが次々に思い出される日々であつた。

その後、岡山県からの入隊者があつてその者たちと、幹部候補生の試験を受けた。試験では幹部候補生は甲種と乙種に区分される。甲種は下級将校尉官、乙種は下士官とに分かれる。私は甲種幹部候補生に合格し、伍長の階級を与えられた。

昭和二十年六月、待ちに待った学校への転属が分かったのである。出発当日が来た。甲種幹部候補生四十二部隊全員が部隊本部に集結、部隊長の訓示があつた。「お前たちに、今後は任せられているのである。期待にこたえて欲しい。戦況はきびしい状況にあり、予断はゆるされない。諸君の双肩に期待するところは大なるものである。ご健闘を祈る」といった意味のものであり、戦況については皆目分かるはずがないのであるから複雑な思いで拝聴していた。

私たちは、きびしい訓練に耐え、内地では体験もしなかった酷暑零下二十度の寒さに耐えて、今日まできたのである。再度原隊に復帰でき、この部隊の下級将校としてその任に当たることができたらどうか。そんな思いを胸に、間もなくソ連の参戦や日本の無条件降伏がまつているとは知らずに、将校道の修練のため教育隊に向かった。

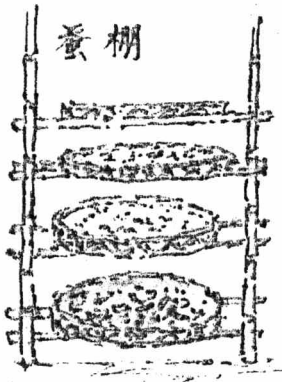
昭和の初め頃の農家の仕事【一四】養蚕

今は衣類は余るほど店頭に並び、バーゲンセールなど安い値段で買うことが出来る。だから衣類がどの家庭にも溢れるほどにある。昭和の初め頃は戦争や世界恐慌などで、経済は麻痺し衣食住にも事欠く有様だった。だから衣類などは大切に使ったものだ。学校へ着ていく服も一着しかないのが殆どで、洗濯してはまた着る。暴れ盛りの子供達だから破れるのも早い。母親は毎晩の様に繕い物をしなければならぬ。

服は継ぎが当たっているのが当たり前だった昔の子供には今のように衣類が有り余っている贅沢は考えられない。この時代を過ごした人達は何でももつたいたいと思うのだ。

ところが、江戸、明治、大正時代の人はもつと容易ではない時代を過ごしてきたのだ。その時代はまず蚕を飼って、糸車で糸を紡ぎ、機織り機で布を織り、その布を裁断して自分で着物を縫って着たのだから、一枚の着物にもどれだけの手間と時間が掛かっているか見当も付かない。だから物は大事にした。再び大変な仕事をしなければ新しい着物など手に入らないのだから。

蚕を飼うには先ず、種紙を買う。A三判くらいの紙にびつしりと蚕の卵が着いている。ふ化すると目に見えないくらい小さな蚕が一面に動いている。蚕の食べ物は桑の葉だから、最初は細かく切り刻んだ葉を与える。蚕が少しずつ成長してくると飼育用の平籠に移して、葉も次第に切り方が荒くなる。その籠いっぱいになるといく



つかの籠に分けて飼育する。四、五センチくらいに成長するともう葉を刻まないまま与える。蚕の食欲は旺盛で聞いていると小雨が降っているような音に聞こえる。さらに大きくなると桑の枝毎、葉が着いたまま蚕の上に被せるように与えるだけで良い。だがこの頃になるとすぐに食べ尽くしてしまうから、桑の葉を畑から取ってくるのが忙しい。やがて蚕は次第に色が白からやや透明な感じになって余り食べなくなる。「蚕様がひけはじめた」と言って、繭を作るまぶしという藁で編んだものを付けた籠に蚕を移す。蚕は繭を作る準備を始める。しきりに首を動かしてやがて場所を決め糸を吐き始める。次第に糸が蚕の周りを囲み蚕は姿が見えなくなる。やがて手を触れても堅くて潰れないほどになる。中では蚕が繭つくりをやめ、さなぎになってしまふ。

この間中寒い日には暖房をしなければならぬ。最後に繭はまぶしからむしり取る。

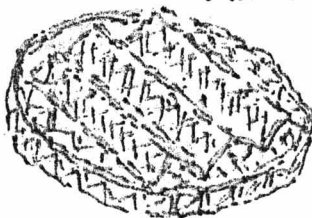
この繭はけばを取る道具で周りのふわふわしたけばをきれいに取り除く。その状態で出荷する。

蚕は春蚕（はるこ）夏蚕（なつこ）秋蚕（あきこ）と、真冬をのぞいて一年中飼う事が出来る。農家の貴重な収入源だった。繭から生糸や絹織物を作る。日本では幕末から明治、大正、昭和初期まで国の財政を支えた大事な輸出品だった。絹の靴下などは欧米の女性の憧れの的だったが、薄くて破れないナイロンにはかなわない。

今は化学繊維に押されて養蚕は衰えてしまったが、今でも絹織物が高級品で有ることには変わりがない。

（石井）

まぶしを作るまぶし



袋田滝本集落のオビンズル様と雨乞い行事

観瀑トンネル入り口近くに堂宇がある。この堂宇は屏風岩下方にある奥の院（本堂）の籠もり堂である。この堂宇の中にオビンズル様が安置されている。オビンズル様は、頭と胴体はあるが手足がない。

よい作物を育てるには、雨は欠かせない。滝本集落の人たちは、昔から田植え時などに雨が降らず、水田の水が不足したときなど、夜になるのを待って、堂宇の中のオビンズル様を両手で抱えて持ちだし、氏子総代の家にもっていく。総代の家の人に気づかれないように、様子を覗いながら縁側などに置いて来る。翌日、総代の家では、オビンズル様が来ていることが分かれると、雨乞いの準備に取りかからなければならない。

総代の家では、さつそく各班（上下集落）に雨乞いの行事をする日取りやオビンズル様を籠もり堂にもどしてもらう連絡をする。雨乞いの行事は、総代が決めた日取りにしたがって夜に行われる。その年の当番に当たる当屋が祈願の準備にあたる。

中央正面に座したオビンズル様にお灯明や御神酒を供え、「雨よふれ、雨よふれ、ふれ。重くなれ」などと唱和しながら雨乞いを祈願する。祈願



が終わると、御神酒を飲み交わしながら作物の状況や世間話などをする。御神酒あげが盛んになったころを見はからって、誰かの「オビンズル様を担ぎ出そう」との呼びかけで、

オビンズル様は、担ぎ棒に乗せられて担ぎ出される。担ぎ出されたオビンズル様は、滝の段上から滝壺へ落とされたり、滝川へ投げ込まれたりする。さらに滝壺や川へ投げ込まれたオビンズル様を拾い上げ、かつぎ棒の上に乗せ、二〇人位で組中をもみ歩いた。

しかし、それだけでは終わらなかった。滝本集落と大生瀬立神集落を結ぶ急峻な崖道、通称「かづま」を、「わっしよい、わっしよい、うおー、うおー」と、声を張り上げながら登り、立神集落や水根集落辺りまでもみ歩いた。

立神集落は、雨が降るのを望んでいるので靈験新たな滝本のオビンズル様が参上すると、御神酒を出してくれた。その御神酒を飲み交わしている間に御飯を炊き、おにぎりをつくり食べさせてくれた。おにぎりで元気をもらい、再び立神と水根集落をもみ歩き、掛け声を張り上げながら滝本にもどり、滝本の堰の上の川の中に入りもみ合い、夜が明けるころ籠もり堂にもどった。

堂宇にもどるころのオビンズル様は、大変重くなっている。昔からオビンズル様が重くなると雨が降るといふ言い伝えがあり、重くなると必ずといってよいほど雨に見まわれた。

滝本集落のオビンズル様の雨乞い行事は、昭和二十四・五年のころまで行われていたが、日本経済の成長と共に簡略化され、もみ歩きから籠もり堂での祈願行事にかわり、昭和五十年をさかいに姿を消していった。

現在、オビンズル様は、滝本の籠もり堂に安置されている。その容姿は、鼻が折れたり、両眼がつぶれたり、頭部、胴体は傷だらけで、かつて行われた雨乞い行事の激しさを物語っている。

平成二十一年一月二十三日採録（小澤）

話者 滝本集落 根本七郎（八十六才）

石井哲男（七十八才）

新聞記事にみる満州移民の断片(六)

―第九次冷家店大子町開拓団の軌跡―

開拓団の生活ぶりについての記事も、「開拓団便り」あるいは現地からの消息という形でいくつか散見される。紹介しよう。

北安省依安縣泰安街から距離にして一八キロの地点にある冷家屯、そこに大子町開拓団の拠点が建設された。当初設けられた「仮本部部落」は、間口八〇メートル、奥行き八〇メートル、四方に土塀を廻して正門を設置したもので、農事指導員であった齊藤良治は、「さぞ造った当時は立派な豪農の家であつたことがうかがいます。開拓団が入植の為此の農家の土地と家屋一切を満州国が強制的に買い上げたものと思われます」(開拓の記録、と述べている。開拓団が入植した農地も、同じく買収によるものであつた。齊藤は、同書で次のように指摘している。「肥沃な黒々とした農地でありました。…満人が祖先から何百年となく営々として耕した畑地に日本人が来て住み、反対に此の地に住み馴れた現住民が本場の開拓者として原野、山林に移動させられて居る現状でありました」と。まさに、家屋も農地も現地人から奪ひ取ることから開拓は始まつたのである。

この「仮本部部落」に隣接して「第一部落」が建設される。ただ、いつから始まつたのかは定かでない。昭和十五年九月四日付「いはらき」新聞に掲載された「開拓団便り」は伝えている。「建設は一步步目標に向つて力強く推し進められてゐます、第一部落が間もなく完成します、二メートルの高さで百メートル四方の土壁に囲はれたこの部落は中央に井戸と園地を設け正門裏通用門以外には絶対外来者の出入を許さず四十個の銃眼が壁間に覗く、隅にはトーチカ形の側防が築かれこゝにも四個の銃眼が敵襲に備へて居り宛然城郭そのものです、この土壁の中

に三十戸の個人家屋と共同畜舎の建設工事が進捗中です、私達は毎日煉瓦、砂、その他建設材料の運搬に忙殺されてゐます」。襲撃へのものものしい警備を固めたこの「第一部落」は、結局同年の晩秋に完成した。オンドルを利用した焚火加熱によつて十分乾燥させた後の翌十六年三月から入居している(開拓の記録)。なお、個人住宅の様式は、満洲拓殖公社が定めた標準型に沿つたもので、一棟二戸住まいであつた。

先の「開拓団便り」はさらに続く。「開拓団に対する物資の配給は豊かで白糖赤ザラ等は大麻袋で倉庫に山と積んであり白米食は腹十分に出来ます、肉類は安価でしかも豊富です、建築材料では釘、針金の入手も困難ではなく木材は内地より輸入の杉板、杉角のほか満洲産えぞ松とど松白樺材等があります、要するに何の不自由もなく千里の異境にある気持は全くいたしません、さゝやかながら旧盆も営みました、十三日の午後は早々と入浴を済まし香をたき北満の野花をサイダー瓶に挿て供へチャンチュウーに豊富なバイメン(小麦粉)の手打饅頭で形ばかりの口迎へをしました、十五夜はうまく晴れて大子と同じ月が広野一面を照らしてゐました、白樺づくりの湯槽の中から仰いだ月の光はまた格別でした、女子班は庭に積み重ねた木材の山にのぼつて唄ひました、正門の展望台上には奉仕隊員の歩哨の姿が月光にくつきりと浮かびあがつてゐます、虫の音、満馬の嘶き、犬の遠吠えもはるかに聞こえて一同は夜の更けるのも忘れ心ゆくまでこの一夜を語り合ひ想ひに耽つた事でありました、十六日には演芸大会が催され相撲と隠し芸の披露に大賑はひ満人の見物も集まつて一日を愉しく過ごしました」。

これは、渡満して一年目の生活の一端である。生活物資、建設資材及び各種資金等々の受け渡しは満洲拓殖公社が仕切つていた。「何の不自由もな」い生活が描かれているが、さて実情はどうだったのであろうか。

(齊藤)

【資料紹介】『茨城県産業百人物事蹟』の（公保忠次

昭和七年刊行の『茨城県産業百人物事蹟』は、五百余名の候補者の中から、県庁各課・各農会の二十五名の審査員が、「人物の選奨は功成り名遂げた所謂知名の士を選抜したのでなくてこれから大いに働いて貰はねばならぬ人達ばかりが選奨されている」から「益々奮闘努力して貰ひたい」と選定した。

当時は、第一次大戦終了後の戦後恐慌、金融恐慌から、昭和四年（一九一九）の世界恐慌と、諸物価は暴落し、農家経済は困窮を極めていた。そのような中、農業経営の共同化に取り組んでいた大子町山田の大久保忠次も選定された一人である。大正三年（一九一四）に堆肥製造組合を設立、昭和二年に山田野出畑農事組合を設立、昭和七年には蔬菜果実出荷組合を設立している。当時の大久保の実践を紹介しよう。

大子高等小学校を明治四十三年三月に卒業（明治二十八年生まれ）。両親が老年であったため二十二歳の時（大正五年）に一家の経営を引受けた私は、当時農村の状況に鑑み一家経済の基調を自給自足主義におき、自ら勤儉を旨とし奢侈品絹物は一切身に着けざるを信念とし、常に余力利用の副業を計画しました。耕地は水田一町歩、畑六反歩（内煙草一反五畝歩、蔬菜園芸用畑一反二畝歩）、促成十柵と養鶏若干を経営しました。

共存共栄の実をあげるには共同の力、組合の力によるべきであるを信じ、幸に地域の共鳴を得て大正三年九月堆肥大量製造組合を設立し、堆肥製造は勿論各種の共同作業にあたりました。

大正七年、右組合名を農事組合と改称して事業を拡張し、発動機を購入して労力の節約と自給自足を計り、余剰労力は乾田煙草跡地の利用その他に配給し、なほ余力ある時は剥剝に精米に各地に出稼ぎし、私のみでなく全組合員一致団結して多角経営に努力しました。・・・組合戸数は七、労働者総員二十三名

であります。幸に私の家は隣家近傍に徹底し組合の組織相次ぎ現在では共同組合数大字（山田）に五、町内（大子町）に二十八を算するに至りました。

生産技術の大切なことは申す迄ありませんが、また一面重要なのは販売方法の不当であります。従来穀物の販売には農業倉庫特定倉庫がありまして不便ではありませんでしたが蔬菜には販売機関が欠けていたので農家の不利益は甚大でした。出荷組合の設立は蔬菜栽培者共通の要求となりました。

そこで私は町農会に謀り、本年（昭和七年）一月保内蔬菜出荷組合を設立しました。賛成者三十余名、手始めに東京神田市場に出荷し八百余円の売上げを得ました。

農事組合も、現在では、町農会の統制の下に年一回組合員大会を開きその決議に従って仕事を進めています。

決議

経済的肥料配合を基礎として米は反当り四石、大麦は五石、小麦は四石を目標・・・煙草は一反歩当り二百円以上の賠償金を得る・・・桑園の改良と養蚕飼育の改善・・・木炭製造を励行・・・自家用醬油醸造を励行・・・蔬菜栽培の改善を計り共同販売を實行する・・・婦人講習講話会を開催し農業知識の普及を計ること・・・各種の共同作業を實行し共存共栄の実を挙ぐるべく組合員団結を一層鞏固たらしむること。農村を安住の地たらしめんが為勤労の美風と農業尊重を鼓吹せしむること。

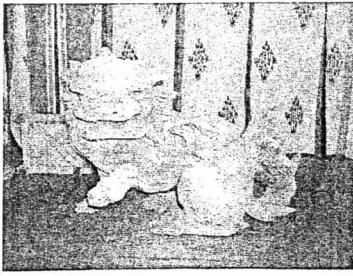
私は全くの百姓で業績とても見る可きものを持ちません、ただ、目下暴威を振ひつつある農村不況は匪賊であると考へ、それを掃蕩し以て農村を安住の地たらしめることを理想に微力を竭して居るものであります。

家族は父彦太郎（七十五歳）、母たけ（七十四歳）、妻ヤス（三十八歳）、他に四男二女ありますが、多くは小学校在学または幼少のため、農事を手伝ふのは長女いわ（十九歳）のみであります。（野内）

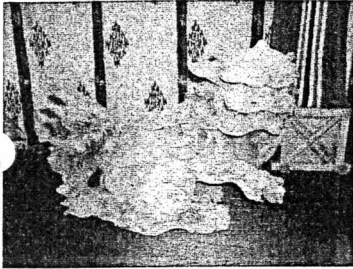
諏訪神社の狛犬

狛犬は、神社や寺院の建物内において、神や仏を護る目的で置かれたものです。特に神社においては、神殿の中に置かれていることが多く、神道美術の代表であるとも言えます。茨城県立歴史館において、五月二十二日（土）から六月二十七日（日）まで、県内の優れた狛犬を取り上げた企画展「狛犬の魅力」が開催されました。今回の展示では、初公開となる県内最古の狛犬（鹿島神宮蔵）をはじめとした、新発見資料（十五点）も展示されました。その中で、小生瀬にある諏訪神社の狛犬が展示されましたので紹介します。

この狛犬は、神殿前に守護獣として奉安されていたものです。歴史館の調査によると、阿形が高さ四十六センチ幅六十五センチ奥行二十八センチ、吽形が高さ四十六センチ幅六十五センチ奥行二十九センチ、ケヤキの一木造。両像とも首を大きく曲げて見る人に顔を向け、片方の前脚を上へ上げ、尾を立てるなど、動きのある姿をしています。耳を伏せ、たてがみは上が巻毛で、下が直毛です。阿形も吽形と同じように頭に角をもっています。



阿形



吽形

正徳二（一七一二）年、元文二（一七三七）年、弘化四（一八四七）年に社殿の修繕や造営が行われており、造形全体が同時代の社殿彫刻の獅子や石造の参道狛犬と似ていることから弘化四年のころの製作と推定しています。現状では、素地（木肌）が現れていますが、当初は彩色が施されていたそうです。

木造の狛犬は、町内では珍しく、大変貴重なものであります。

（皆川）

編集後記

今年も「ふるさと歴史講座現地めぐり」を二回にわたり開催します。

◎第一回 期 日…平成二十二年九月二十六日（日）

主な見学場所…佐竹寺、西山荘、久昌寺、義公廟、ヨネビシ醤油、若宮八幡宮外

◎第二回 期 日…平成二十二年十月二十三日（土）

主な見学場所…願誓寺、越方神社、鷲子山上神社・

伍智院、吉田八幡神社・三浦杉外

編集人 斎藤 典生（茨城大学人文学部）

野内 正美（元 教員）

石井喜志夫（元 教員）

小澤 圀彦（元 教員）

斎藤 裕也（大子町教育委員会）

皆川 敦史（大子町教育委員会）

編集発行 遊史の会

大子町立中央公民館歴史資料室気付

久慈郡大子町池田二六六九番地

〒319-3551 ☎0295(72)2627